

◆九月十五日(天気・快晴)

林道の上はゴロである。下のゴロとはちがつた感じで、岩はデコボコのうえコケが付いている。沢自体もぐんぐん高度をかせぐ。F11二段一〇^ノを過ぎ少し進むとF12七^ノ、またすぐにF13七^ノ。ここは直登はちよつと無理。左岸を捲く。上に出ると川原。川幅もあまりない。平坦な沢で、所々曲がりくねっている。一時間余りで二俣。右には水流があるが左が本流のようだ。ヤブがかかってくるが、そのまま先に進むと、明月荘に至る木道に出た。

(記・中)

(タイム)

林道六・五〇―沢終了九・三〇―木道九・五〇―明月荘一〇・〇〇

砥 沢 (下降)

一九八〇年六月二十九日

◆天気(曇り時々晴)

冷水沢からヤブこぎで砥沢に降り立つ。時刻は、一〇時〇五分。時間的にまだ早いので、上部を偵察に出ると、

思わぬ滝の連続である。地形が平坦になるまでつめ、右

にヤブをこいでもう一つ右の支沢を下降する。こちらにも立派な滝があった。一時間半程かかってもとの地点、冷水沢からのヤブこぎで出たナメの所に戻る。

一息いれて下降開始。すぐに林道に出る。ここから下は平凡となる。一時間二〇分程で木材の伐採地に出て、ここから右の尾根上の林道に上がる。(記・中)

(タイム)

出合一〇・〇五―廻行終了一〇・五〇―右沢一〇・五五―一・一五―本流一・三〇―林道一・四五―下降終了一三・二〇―林道一三・四〇

冷 水 沢

一九八〇年六月二十九日

◆天気(曇時々晴)

身仕度を整えて八時廻行開始。沢幅は狭く、石にはコケがびっしりついていて、すでに源流という感じである。とても水が冷たくて長い間足を入れられない。滝は全くかからない平凡な登りが続く。一時間余登り続けたあと、

ガスが出てきて、現在地が十分に確認ができないまま、砥沢に向けてヤブこぎに入る。

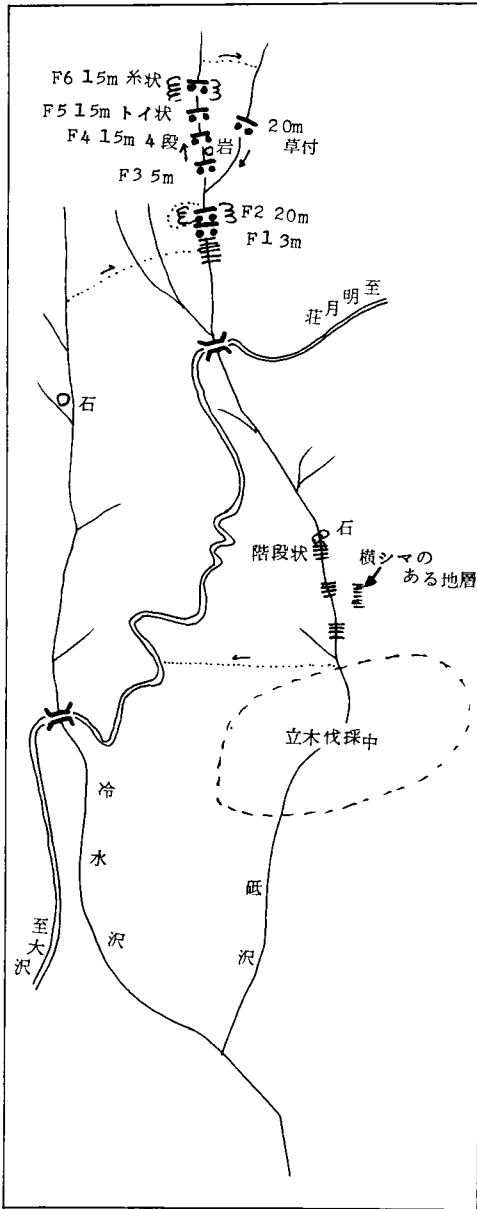
(タイム)

出合八〇〇―終了九二一〇

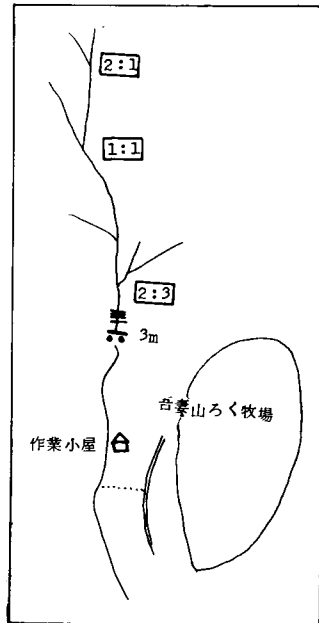
元小屋川 (下降)

一九八〇年九月十五日

◆ 天気 (快晴)



冷水沢，砥沢 (作図：)



元小屋川 (作図：半)